

本学学生の英語学習および 本学外国語カリキュラムに関する意識

—— 学生アンケート調査からの報告 ——

太 田 聡 一

Abstract : A student survey on the foreign language curriculum at Tohoku Fukushi University and their English study was conducted in two of compulsory English classes for freshmen and three for sophomores in order to learn about the students' general attitude toward English education and their needs of English skills. The result shows that 1) many students are highly aware of the needs of English skills in their future and hence the needs of English study during their university education, 2) however, it appears to be difficult for many of the students to maintain their motivation to study English, 3) although many students are aware of the necessity of English skills, the levels of English proficiency which they are aiming to acquire during their university education is not necessarily high.

キーワード：英語，カリキュラム，意識調査

1. 背景と目的

小学校 5, 6 年次における「外国語活動」の導入に続き，文部科学省は，2020 年度をめぐり，小学校高学年における英語の教科化（現状は「活動」のため，成績評価の対象になっていない）と授業回数の増加，さらに教科とはしないものの，3, 4 年生から英語の授業を開始する方針を決定した。

この決定に対しては賛否両論様々な声が上がっているものの，この決定により，英語力の必要性が，将来的にこれまで以上に強調されるであろうことは疑いの余地がない。

楽天市場，ユニクロといった大手企業の英語社内公用語化の動きや，経団連による，英語が使える人材排出に向けた英語教育改革の要請，それに伴う，大学入試への TOEFL 導入議論など，昨今，日々メディアに登場する英語教育，また日本人の英語力に対する議論を象徴する出来事には枚挙に暇がない。

しかしながら，他大学に比べ，一般企業への就職を希望する学生数が少ない傾向にある本学においては，学生の英語，および他の外国語に対する学習意欲が総じて高くないように見受けられる。外国語教育連絡会，および国際交流センターを中心に，TOEIC IP テストの実施や，海外語学研修事業，外国語自習室の設置など，学生の英語，外国語学習を促進するための試みが行われているものの，現状ではその効果は限られた範囲にとどまっている。

佐藤（2008）が主張するように、実のある英語教育を実現するためには、学習者の実態を正確に把握することが重要である。本研究は、今後数年をかけて実施する予定の本学学生の英語、外国語学習に対する意識調査（およびその意識の変化を知るための追跡調査）のために行った予備調査の結果をもとに、現時点における本学学生の、英語を含む外国語カリキュラム、および英語学習に対する意識と、進級に伴うその変化を考察するとともに、将来の本格的な意識調査に向けた課題を明らかにすることを目的とする。

2. 調査

2.1 被験者

本研究の被験者は、本年度（2013年）筆者が本学において担当した基礎教養課程の授業、「英語Ⅰ（1年次生前期）」2クラス60名、「英語Ⅲ（2年次生通年）」3クラス73名の、合計133名である。全学部、全学科共通の必修科目であるというカリキュラムの特性上、上記のクラスはほぼ全て、複数の学部学科の学生が混在した状態で実施されている。しかしながら、英語Ⅰのうちの一方のクラスは、時間割による履修上の制約により、履修学生が全て子ども教育学科所属となっている。また、英語Ⅲのクラスは2年次生必修の科目ではあるが、3クラスともに若干名の3、4年生が再履修生として在籍している。英語Ⅰ、英語Ⅲにおける、学部学科、学年の分布については、表1, 2, 3を参照されたい。

表1 英語Ⅰ学科別人数

学科	人数
社会福祉学科	3
社会教育学科	1
福祉心理学科	6
産業福祉マネジメント学科	5
情報福祉マネジメント学科	3
子ども教育学科	31
保険看護学科	11
合計	60

表2 英語Ⅲ学科別人数

学科	人数
社会福祉学科	20
社会教育学科	4
福祉心理学科	15
産業福祉マネジメント学科	11
情報福祉マネジメント学科	3
子ども教育学科	12
医療経営管理学科	8
合計	73

表3 英語Ⅲ学年別人数

学年	人数
2	63
3	5
4	4
不明（未回答）	1

2.2 アンケート調査用紙

本学学生の英語、および外国語学習に対する意識を調査するために、本研究では、2013年度最初の授業の際に、アンケート調査を行った。実施においては、筆者自身がアンケート用紙の配布、監督、回収を行った。所要時間は、上記5クラスともにおよそ10分程であった。

アンケート用紙は、以下の7つの質問から成り立っている。

- 1) 東北福祉大学では、英語を含む外国語 I/II/III が全学部共通で必修となっています。これについてあなたはどのように思いますか？理由も書いてください。
- 2) 英語の履修を決めた理由は何ですか？自分の理由にいちばん近いと思うものを選んでください。
- 3) 中学・高校を通じて、英語は得意教科でしたか？苦手な教科でしたか？
- 4) 現時点で、将来の自分に英語力の必要性を感じていますか？
- 5) 英語力の必要性が盛んにメディア等で取り上げられていますが、それについてあなたはどのように思いますか？
- 6) 英語学習の到達目標について伺います。在学中にどのような英語力を身に付けたいですか？
- 7) 東北福祉大学で提供されている、交換留学や海外交流プログラムについてどのように思いますか？

質問に対する回答形式は、1), 3), 4) および 5) は、4段階のリッカート尺度による回答、2) は自由記述を含む5項目からの選択、6) は11項目からの複数選択、7) は4項目からの選択となっている。

3. 結果と考察

全クラスのアンケート調査が終了した後、その結果は筆者により集計された。集計は、1年次と、2年次以上とで、どのような意識の変化が現れるかを考察するために、英語 I、英語 III、それぞれを別個に行った。本稿においては、本学外国語教育カリキュラム、および学生の英語・英語学習に関する質問項目に対する回答を考察することが目的のため、質問7については割愛した。また、本研究は参加者が133名と比較的少なく、同一集団におけるその意識の経年変化を検証するものでもないため、統計的検定による有意差の抽出は行わず、記述統計の結果からのみ考察を行った。

3.1 質問1 本学の外国語カリキュラムについて

1年次に比べ、2年次になると、外国語カリキュラムに対する姿勢にやや消極性が目立つよう

表4 質問1 東北福祉大学では、英語を含む外国語 I/II/III が全学部共通で必修となっています。これについてあなたはどのように思いますか？

	1 年次生		2 年次生	
	度数	パーセント	度数	パーセント
1) 全面的に賛成する	42	70%	22	30%
2) どちらかといえば賛成する	16	27%	43	59%
3) あまり賛成できない	2	3%	8	11%
4) まったく賛成できない	0	0%	0	0%
合計	60		73	

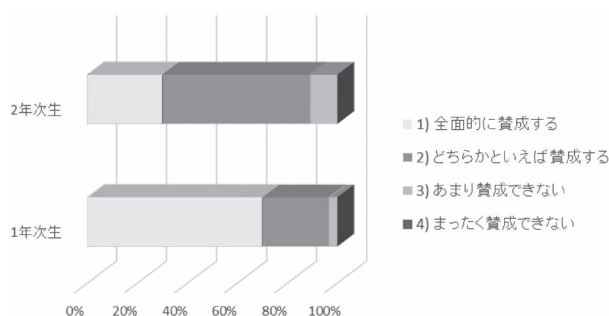


図1 東北福祉大学外国語カリキュラムについて

になる。2年次においても、依然としてカリキュラムの存在に前向きな答えが多数を占めるものの、全面的賛成が大多数（70%）を占めていた1年次に比べると、消極的賛成（59%）が目立つうえ、消極的反対意見が3%から11%へと大幅に増えている。消して少なくない数の学生にとって、主専攻とは関係のない外国語学習が、学年が進むにつれて負担に感じられてくる様子が伺える。

3.2 質問2 英語の履修を決めた理由

将来英語が必要だからと回答した学生は、1年次、2年次ともに40%を超えている。この数字は、後述する質問4および、質問5に対する回答と照らし合わせるとやや少ないように感じられる。これは、特に1年次においては学科の偏りが原因と考えられる。前述のように、1年生の過半数が他の外国語の履修を認められていない（英語が必修）子ども科学部所属であるため、これらの学生の多くが、回答5「その他」を選択した上で、自由記述欄に、「必修だから」という旨を記していた。また2年次においても、同様の理由を記したケースが見受けられた。さらに2年次では29%の学生が、「他に履修したい外国語がなかったから」と回答しているが、1年次に比べて大幅に増えている理由を説明するには、更なる調査が必要である。

表5 質問2 英語の履修を決めた理由は何ですか？ 自分の理由にいちばん近いと思うものを選んでください。

	1 年次生		2 年次生	
	度数	パーセント	度数	パーセント
1) 将来英語が必要だから	26	43%	29	40%
2) 英語が好きだから	8	13%	5	7%
3) 他に履修したい外国語がなかったから	7	12%	21	29%
4) 友人が履修するから	0	0%	1	1%
5) その他（自由記述）	19	32%	17	23%
合計	60		73	

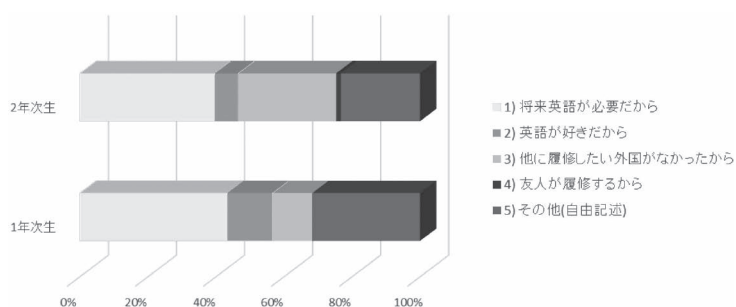


図2 英語の履修を決めた理由

3.3 質問3 中学・高校において英語は得意であったか

1 年次、2 年次の回答傾向に大きな差は見られなかった。「どちらかといえば苦手」、「非常に苦手」を合わせた割合が、1 年次で 66%，2 年次で 72% と、英語を不得手とする学生が過半数を占める本学学生の傾向が現れている。

表6 質問3 中学・高校を通じて、英語は得意教科でしたか？ 苦手な教科でしたか？

	1 年次生		2 年次生	
	度数	パーセント	度数	パーセント
1) 非常に得意だった	1	2%	4	5%
2) どちらかといえば得意だった	19	32%	17	23%
3) どちらかといえば苦手だった	29	48%	34	47%
4) 非常に苦手だった	11	18%	18	25%
合計	60		73	

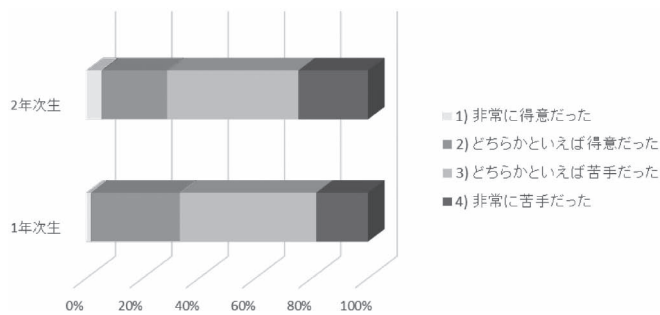


図 3 英語は得意だったか

3.4 質問 4 将来、英語力の必要性を感じているか

「非常に感じている」と回答した学生の割合が、1 年次の 35% に対して、2 年次は 19% とおよそ半分である。しかしながら、「どちらかといえば感じている」と回答した学生は、1 年次 47% に対して、2 年次 62% となっている。これもまた、英語 I を履修している学生に、小学校教員を目指す学生が多く集まっていたことを反映していると考えられる。全体の傾向としては、1 年次、2 年次ともに、英語の必要性についての認識は高い傾向にあった（1 年次 82%、2 年次 81%）。反面、1 年次には全くなかった、将来、英語力の必要性を全く感じないという回答が、2 年次では 3% と僅かながら現れている。学年が進み、将来の方向性が固まるにつれ、実際に英語力が必要とされない業種に対する志向が強まった結果とも考えられるし、あるいは、英語学習に対する倦怠感の現れであるのかもしれない。

表 5 質問 4 現時点で、将来の自分に英語力の必要性を感じていますか？

	1 年次生		2 年次生	
	度数	パーセント	度数	パーセント
1) 非常に感じている	21	35%	14	19%
2) どちらかといえば感じている	28	47%	45	62%
3) あまり感じない	11	18%	12	16%
4) まったく感じない	0	0%	2	3%
合計	60		73	

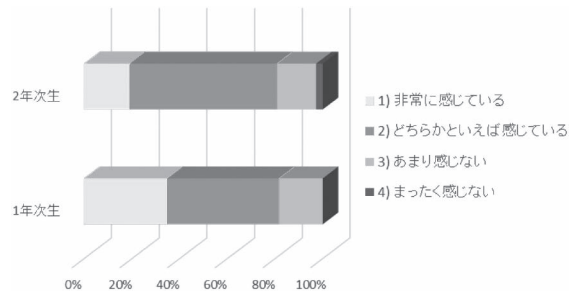


図5 将来英語力の必要性を感じるか

3.5 質問5 メディアが取り上げる、英語力の必要性に同意するか

1年次の全てが、積極的（48%）、消極的（52%）に関わらず同意する回答を寄せたのに対して、2年次では、消極的不同意（10%）、積極的不同意（1%）が現れる。しかしながら、全体的傾向としては2年次も、積極的同意（25%）、消極的同意（63%）と、大多数が英語力の必要性に対するメディアの情報に同意を示している。質問4への回答傾向と合わせて考えても、学生の多くは将来的な英語力の必要性を認識している傾向が強いことが伺える。

表6 質問5 英語力の必要性が盛んにメディア等で取り上げられていますが、それについてあなたはどのように思いますか？

	1年次生		2年次生	
	度数	パーセント	度数	パーセント
1) 全面的に同意する	29	48%	18	25%
2) どちらかといえば同意する	31	52%	46	63%
3) あまり同意できない	0	0%	7	10%
4) まったく同意できない	0	0%	1	1%
無回答			1	1%
合計	60		73	

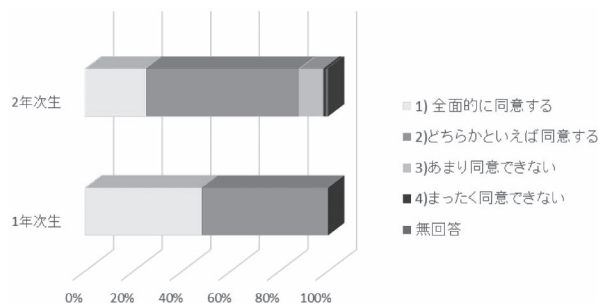


図6 メディアが取り上げる、英語力の必要性に同意するか

3.6 質問6 英語学習の到達目標

選択項目3（買い物程度の日常的な会話ができる）、4（簡単な案内書などが読める）、7（平易な文章を書くことができる）という、到達難易度の低い目標が、1年次、2年次ともに高い回答率を示したのに対して、選択項目2（英語の映画・テレビを字幕なしで理解できる：1年次30%、2年次16.4%）、5（英字新聞が読める：1年次21.7%、2年次5.5%）、9（英検・TOEICなどで準1級・700点以上を取得する：1年次11.7%、2年次1.4%）という、到達が難しいと思われる目標については、1年次と比べて、2年次では回答率が大きく下がるという結果となった。大学入学から時間が経った2年次生の多くにとって、主専攻ではない英語学習に対して意欲を維持することが難しいことを示していると考えられる。

また、選択項目6（辞書を用いて、自分の専門に関する英文が読める：1年次23.3%、2年次20.5%）、8（辞書を用いて、自分の専門に関する英文レポートが書ける：1年次8.3%、2年次6.8%）の、本来学年が進み、専門教育が深まるにつれて現れて然るべきニーズを反映していない回答結果が得られた。これについては、本学学生がそれぞれの専攻において、どの程度英語を介した学習を行っているのか（あるいは行っていないのか）、更なる調査が必要である。

図7 質問6 英語学習の到達目標について伺います。在学中にどのような英語力を身に着けた
いですか？（複数選択可）

	1年次		2年次	
	度数	パーセント	度数	パーセント
① 外国人と自由に会話ができる	16	27%	15	21%
② 英語の映画・テレビなどを字幕なしで理解できる	18	30%	12	16%
③ 買い物程度の日常的な会話ができる	37	62%	45	62%
④ 簡単な案内書などが読める	26	43%	32	44%
⑤ 英字新聞が読める	13	22%	4	5%
⑥ （辞書を使って）自分の専門に関する文章が読める	14	23%	15	21%
⑦ 平易な文章を書くことができる	25	42%	34	47%
⑧ （辞書を使って）自分の専門に関するレポートが書ける	5	8%	5	7%
⑨ 英検・TOEICなどで上級（準1級以上・700点以上）を取得する	7	12%	1	1%
⑩ 英検・TOEICなどで中級（2級以上・500点以上）を取得する	8	13%	9	12%
⑪ 特に目標はない	0	0%	5	7%

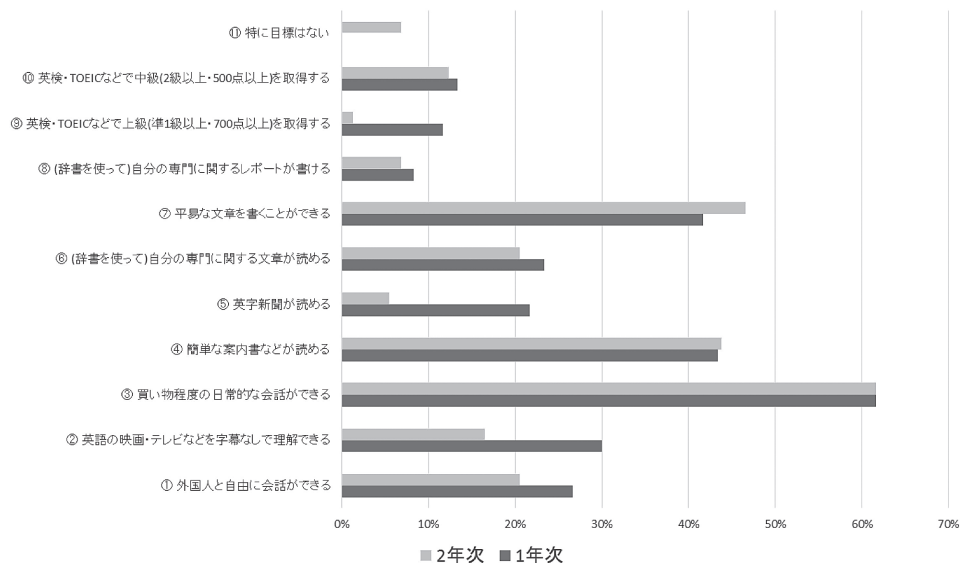


図7 英語学習の到達目標

4. ま と め

今回の結果から明らかになった本学学生の英語力、および英語学習に対する意識傾向は以下の点である。

- 1) 英語力の必要性、英語学習の必要性についての認識は、全体としては高い傾向にある。
- 2) しかしながら、学年が進むにつれて、学習意欲の維持が難しくなる傾向にある。
- 3) 多くの学生が英語力の必要性を認識しつつも、求めている到達レベルについては高くない。

以上の点から示唆できることは、ひとつには、学年が進んでも英語学習に対する意欲を維持できるようなカリキュラム、および学習環境の整備である。また、学生に、どのような英語力が将来的に必要なのか、必ずしも就職を念頭に置いた話や、社会に出てからの話だけではなく、学年が上がり、専門分野についての学習が深まるにつれて、授業やゼミで求められる英語力という視点から具体的に示すことも、学生にはっきりとした学習目標を持たせる上で必要であろう。

今回のアンケート調査は、筆者が担当するクラスのみという、ごく限られた集団を対象としたものであり、これが本学学生の全体的傾向を示唆するものであるとは結論できない。また、1年次と2年次が異なるグループであり、その回答傾向に見られる差が、同一集団の経年変化を示すものではないため、学生の進級に伴う意識変化を、必ずしも正確に反映しているものではない可能性がある。さらに、筆者が英語のみを担当する都合上、本学で開講されている他の外国語（ド

イツ語、韓国語、中国語)については、履修学生の傾向が不明のままである。

今後は、学生全体の、外国語学習に対する意識傾向を把握するために、質問内容を精査した上で、全外国語クラスを対象としたアンケート調査を行い、それをもとに学科別の傾向分析や、同一学生の進級に伴う意識変化を採る縦断的調査などが必要となる。また、その結果を基にした、外国語カリキュラム、および外国語学習環境の改善が望まれる。

参 考 文 献

- 佐藤博晴・佐藤夏子(2008)「本学学生の英語学習に対する動機付けと学習行動に関する調査」『山形県立米沢女子短期大学紀要』44, pp. 25-33
- 鈴木渉・Adrian Leis・安藤明伸・板垣信哉(2011)「大学生の英語学習に対する動機づけ調査 — Dörnyei の L2 motivational self system に基づいて —」『宮城教育大学国際理解教育研究センター年報』6, pp. 34-43
- スミス山下朋子(2012)「薬学系大学生の英語学習に対する意識：学部生を対象とするアンケート調査から」『大阪薬科大学紀要』6 (2012), pp. 41-47